



祥龍寺供養塔等の被災と 復旧について

柳田辰巳

平成七年度辰巳会新年例会（午前十一時三十分 於…東明閣）の行われる予定の日の午前五時四十六分突然起った兵庫県南部地震はマグニチュード七・二、史上初の地震七を記録し、死者六千二百八十四名（平成七年末日、神戸新聞社調査）という未曾有の災害をもたらしました。

祥龍寺に百mと離れぬ小生宅もドーンと突き上げる様な揺れに驚き隣の部屋を透かして見ると（まだ薄暗かった為）、ガラスの破片（蛍光灯の落下、飾り戸棚よりの食器転落によるもの）が部屋一杯飛んでるのを見ました。そこで先ずスリッパを履き二階のベランダより南方を見ると一筋の黒煙が上がりました。

それが午前十時頃再び見た時は三筋の煙となり、J R 六甲道駅かその西側で火災が発生している事を察知出来ました。

祥龍寺の道を挟んで北側の崖は五助橋断層層なのですが、幸いこの地震では動く事なく他の断層の動きによる地震波のみの被害に止まったのは幸いでした。それでも祥龍寺の被害は概ね次の様な状況です。

- 一、山門の大扉一枚、上下動により蝶番が外れ下に横たわりました。
 - 二、本堂北側及び西側の瓦が崩落しました。
 - 三、本堂内外の壁が剥離しました。
 - 四、離れの南部分の瓦約三分の一が崩壊しました。
- この様な環境下に伝聞して井戸（管応峰現住職が八年前に設けられ

た）水を求める人々が日に日に増し、一時は門前市を成す有様でした。（約半月続きました）

一方各地（地元のみならず西宮方面からも）より運び込まれる何も着せられない遺体、ふとんにくるまれた遺体、毛布一枚にくるまれた遺体は約四十体にも達し、本堂のみならず一時地藏堂にも安置され、検死官及び遺族が一週間程も寝泊りする有様でした。

さて表題の祥龍寺供養塔等の被害ですが、製作年順（同日の場合は没順）にて列記致します。

- 一、鈴木よね女史像（昭和二年五月建立）
円形雪見灯籠二基倒壊転落し破損しました。
- 二、銅像下の竿石と台石及び自然石の敷石いずれもセメント剥離し、敷石の一部は動く状態となっていました。
- 三、柳田富士松翁頌徳碑（昭和二十三年十二月建立）
竿石は略中心を軸に向って右は右後方に、向って左は左前方に約三十度水平にずれました。
- 四、金子直吉翁頌徳碑（昭和二十三年十二月建立）
竿石は向って斜め後方に転倒し、北西側の玉垣及び鉄柵を破壊しました。
- 五、辰巳会物故者供養塔（昭和四十三年四月建立）
供養塔空輪（最上部）が転落し、前部にある水差石の前部に当り破壊した後東側に横転しました。
- 六、供養塔笠石（上から二番目）は約四十五度水平にずれました。
前部水差石は約十cm欠け、黒御影石表面の色と違った異色が露出して居ります。
- 七、又供養塔に一番近い（北側）の敷石が一枚割れました。

五、西川文蔵翁頌徳碑（昭和五十年五月十五日建立）

異常は認められませんでした。

六、別件乍ら亡父柳田義一翁碑（金子直吉翁頌徳碑前）の『星影を孕む春暁の花びら』は半分埋込式の為異常ありませんでした。他事乍ら御休心下さい。

次に復旧工事ですが

一、鈴木よね女史像

最初は銅像下の竿石（自然石）と台石を取り外しボルト固定する予定でしたが、検証の結果自然石は石目が多くドリルの切削加工に堪えない恐れが出て来た為中止し、変りにのみ切り及びのみ跡加工（摩擦を増す為石の表面に凸凹を作る加工）の後モルタル接着する事としました。

他のぐらつく敷石もモルタル固定をする事としました。

又雪見灯籠については寄進者高畑ちよ様の御意向で撤去する事になりました。

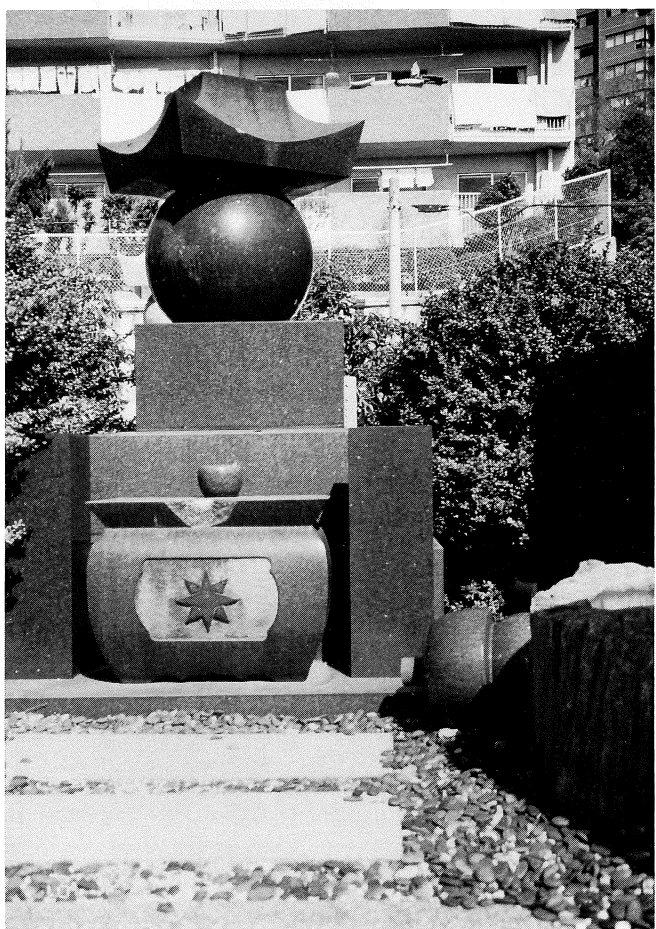
二、柳田金子両翁頌徳碑

竿石と台石に二箇所上下同長にドリルで削孔し、直径二十五mm、長さ三十cmのステンレスボルトを穴心に差込み接続しました。

又玉垣については石の一部が欠落してますが、後方でもあり目立たぬ為そのままとし、鉄パイプのみ元の素材で修復しました。

三、辰巳会物故者供養塔

五輪の塔全部（空輪、笠石、玉、上台、中台）を外し、各層各部分にのみ切り、溝切り加工後、五輪共通の上下



完通する削孔をし、ステンレスボルトで固定しました。

尚水差石及敷石一枚は震災の跡として、そのまま残す事にしました。

これに要する費用は当初供養塔を除き二百二十五万円（消費税別）という見積りでしたが、事務局の御骨折で百七十七万円（消費税別）という予算で発注しました。然し乍ら工事後の費用の増額（主として基礎部分の工事費）も考えて置く必要があります。後日事務局より収支が明らかになるとありますが、多少の変更は御容赦願います。

以上簡単ですが地震直後の状況を背景として供養塔等の被災状況と復旧につき御報告申し上げます。

東洋遊園地株式会社

田中卓次

戦前鳥羽には東洋遊園地と称する株式会社があった。これは株式会社鈴木商店系列の会社で、待月楼、對神館、皆春楼の三旅館を経営していた。

鈴木商店倒産に従い東洋遊園地株式会社の経営は神戸製鋼所に移り、実質的経営は鳥羽電機製作所に委任されていた。

待月楼

待月楼は鳥羽町、南方の町はずれ、赤崎神社前面の海岸にあった。

鳥羽に於ける高級旅館で大将旅館と称せられていた。陸海軍の大将級の将校が来鳥の節は待月楼に宿泊されるのが通例であった。

宿泊された大将の宿帳である大将名簿があった。座敷の床には刀掛（軍刀掛）が常備されていた。

終戦時、進駐軍（米軍）との鳥羽重機工場の接收交渉は待月楼で行われた。

戦後待月楼の別館として鳥羽町小浜海岸に別荘的旅館「さはる」を新築した。初期は来客を待月楼より鳥羽湾を横切り小舟にて送迎していた。大変好評であったが、待月楼と共に売却され今は無い。

對神館

昔は国鉄鳥羽駅裏の海岸にあり（現近鉄鳥羽駅正面）、風景良好で地理的に最高の旅館である。

伊勢市に高級旅館、戸田屋がある。神戸製鋼所の田宮社長の大のお

気に入りて来鳥の節は伊勢の戸田屋旅館に宿泊されるのが常であった。戦時中、伊勢市が米軍の焼夷弾攻撃を受け戸田屋本館は全焼した。戦後戸田屋主人は小田嶋電機工場長に懇請して對神館を借り受け、鳥羽に於て、戸田屋別館として営業を開始した。専門家の経営により戸田屋別館は繁栄し、増築に改築で以前の對神館の姿は残っていない。

皆春楼

鳥羽城山の向い樋山の中腹にあり眺望は良好であるが、旅館としては地理的に不利である。

造船所社員の宿舎か、倶楽部的に使用する建物の様に思われた。眺望の良い樋山の中腹に富士見台があった。私の来た時はすでに建物は無く、僅かに解体後の土台の一部のみが残っていた。

戦後鳥羽市当局は鳥羽の発展策として樋山開発を計画された。

樋山中腹まで自動車道路を開設して頂上に神社を建立し、四国善通寺の金比羅宮分社を遷宮し、鳥羽への旅行者の増加を計画された。これに従い皆春楼の一部が社務所として使用された。次いで横須賀の浦賀ドック株式会社より金比羅宮分社に対し大鳥居の寄進があり、国鉄鳥羽駅前通りに設置された。

この様に鳥羽市発展に尽されたものの、現在金比羅宮分社に参拝客は増加しない。

大正年代より昭和年代に、造船所や重機製作工場として繁栄した工場も、関連する附属土地建物共全部売却され今は無いが、僅かに株式会社鳥羽神鋼重機として別所に残存された事は、以前関係した者にとつては僅かな慰みである。